幼少期キャンプの実際

中野　友博[1)]

An actual report of the camp for childhood

Tomohiro NAKANO

Key words：camp, childhood
キーワード：幼少期，キャンプ

1．はじめに

本学の野外スポーツコースは，教育としての野外スポーツ（自然環境の中で，身体を使って行う活動）を実践，研究している．その活動は組織キャンプとも呼ばれ，①「意図，目的」を持って②組織的に行われ，③立案から実施までのプロセスを重視し，④指導者が存在し，⑤キャンパーを理解していること，そして⑥自然環境と野外での生活や活動がある，以上６つの特徴がある．

組織キャンプの歴史は古く，イギリス発祥のボーイスカウト活動やドイツ発祥のユースホステル運動，アメリカ合衆国では学校教育での転地療法やＹＭＣＡ等の活動に端を発している．日本でも，明治時代後半から大正時代にかけてボーイスカウト活動が取り入れられた．大学艇庫の北にある近江舞子の雄松崎には，1916（大正５）年に日本で初めてボーイスカウトが野営を行った場所としての石碑もある．

大学周辺の豊かな自然環境を活かして，2007年に幼少期の子どもを対象にした組織キャンプを始めた．そこで本稿では，８年間継続してきた「びわこちびっこキャンプ」の実際について，企画の目的から評価までを述べていく．

2．びわこちびっこキャンプを始めた動機

第１回のキャンプを始めた2007年は，びわこ成蹊スポーツ大学が開学して５年目，野外スポーツコースのゼミを担当して３年目であ

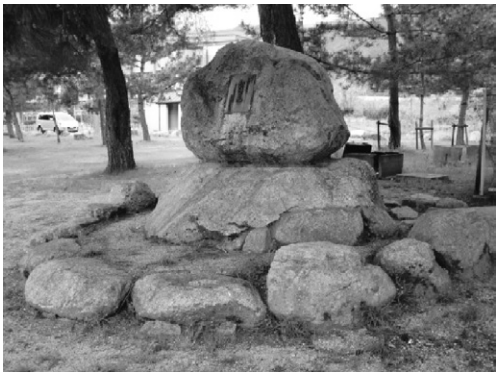

図1．ボーイスカウトの日本で初めての野営地の記念碑

図2．記念碑の説明版

1）生涯スポーツ学科

る．学生の指導実習の機会を確保したいとの思いから，そのためには自前でキャンプを企画，運営する必要があった．また，大津市環境政策課からの依頼で「大津環境人を育む方針」の策定に関わり，大津環境学習活動実行委員会のメンバーとして就学前の子供たちを対象に自然体験活動を実践するためには指導者研修の実習フィールドが必要であった．その実習にびわこちびっこキャンプが利用されることにもなった．

3．幼少期の自然体験の企画

企画の目的は，滋賀県湖西地区，特に大津市北部地域は，比良山と琵琶湖に挟まれた自然環境の素晴らしい地域であること．この地域には４つの公立小学校と２つの公立幼稚園，２つの公立保育園が設置されているが，これらの自然環境を教育課程や保育カリキュラムに十分に組まれていないのが現状と思われること．以上２点から，びわこちびっこキャンプでは，この素晴らしい自然環境を十分に活かし，生活環境である地元の自然の素晴らしさを体験すること，再発見することを目的にプログラムを展開することにした．

更にキャンプでは「挑戦すること」「協力すること」「我慢すること」を３つの約束とし，小グループでの体験が幼少期（幼児～小学２年生）の子ども達の自立へつながるように指導体制を組織し，なるべく多くの幼少期の子ども達に自然体験の機会を提供することを重視している．そのため，参加者の選考には初めてこのキャンプに参加する子供を最優先とした．

自前のキャンプを企画して一番の課題は，どのようにして参加者を募集するか広報の問題である．大津市，大津市教育委員会の後援を得ることで，旧志賀町を中心とした大津市北部地域の公立小学校５校，幼稚園３園，保育園２園の小学１，２年生，年長児の家庭にチラシを配布することができた．毎年定員以上の応募があり，そのため参加者のリピーター率は０％となっている．参加者の合計は８年間で260人になった．

指導者は，野外スポーツコース，地域スポーツコース等の教員が中心となっているが，学生の指導実習の場の確保の観点から，生涯スポーツ学科特に野外スポーツコース２年～４年生の学生達を中心に組織する．今までに地域スポーツコース，コーチングコースの学生も指導をお願いしている．学外からは幼稚園教諭や保育園保育士，子育て支援センター職員，大津環境学習ボランティアの方々が研修で参加している．指導スタッフの合計は８年間で187名になり，スタッフ一人あたりの参加者は1.39名となった．

4．びわこちびっこキャンプ2014の実際

キャンプは，日帰りのデイキャンプと３泊４日の２回である．活動は琵琶湖での水遊び・カヤック体験，比良山でのトレッキング（往復６㎞）がメインで，テントでの宿泊体

図3．キャンプ生活

験，野外炊事となっている．今年度は，トム・ソーヤスクール企画コンテスト支援団体になった関係でキャンプの実際については，「自然体験.comのホームページ（http://www.shizen-taiken.com/dbnews.html）」HPでも確認できる．

5．キャンプの評価（参加者の保護者の視点から）

幼少期の自然体験の効果を検証するために，キャンプ説明会時，キャンプ直後．キャンプ１ケ月後の３回，保護者の視点からの子どもの様子や行動についてアンケート調査を実施した．内容は①自然に対する興味関心②家庭での生活態度③コミュニケーション④自己成長の４尺度からなっている．質問項目は全25項目で「かなりあてはまる」から「あまり当てはまらない」までの４段階で得点を算出した．質問項目の例として①であれば「外で遊ぶことに積極的である」②「お手伝いをする方だ」③「一人でいるより友だちと遊ぶことが多い」④「嫌なことがあっても我慢できる」などである．

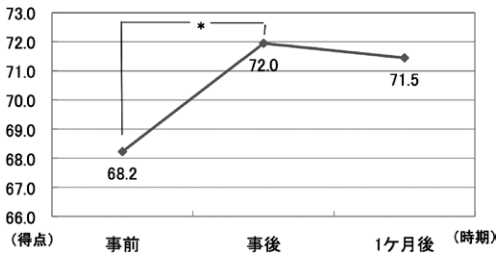

図4．全体の得点　*p<.05

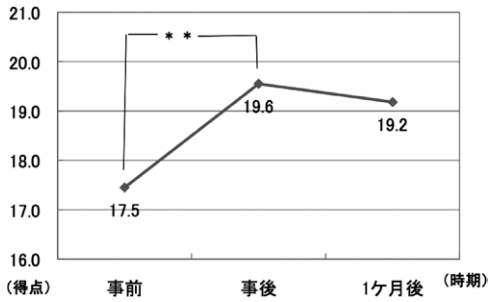

図5．自己成長の得点　**p<0.01

キャンプに参加した小学１，２年生24名を対象にアンケートを集計した結果，全体の得点では事前―事後で有意に得点が向上した．（図４）また，④自己成長の得点のみが有意に向上していた．（図５）

今回のアンケートの結果，キャンプの効果として「自己成長」について向上した．またキャンプ終了後に，参加者がプログラム中にどのような体験をしたのか，親子で一緒に“おもいでカード”を記入した．「がんばったこと」「たのしかったこと」「もっとやりたかったこと」の３点である．記入からは，個々の参加者が自然活動において，たくさんの「がんばったこと」を体験し，さまざまな「たのしかったこと」を感じ，さらに「もっとやりたかったこと」を見つけだしていることがわかった．

6．さいごに

自然の中で他者と共に行う体験では，「自然環境から」「他者から」「活動から」刻々と変化する多様な刺激を同時に受けることになる．その影響を主体的な行動としてアウトプットしていくことが，自然体験活動の効果として表出してくることになる．それは「生きている」ことの喜び，楽しさを実感することにつながってくる．「美しい花」を見て「美しい」と感じたり「雄大な景色」に身を置いて「素晴らしい」と素直に感じることのできる豊かな感受性を持った人間であり，そういう子供たちに共感できる指導者を育てていきたいと考えている．